

Philologie de la civilisation japonaise

Cours du 12 mars 2013

Les « Poèmes des dieux »

Jingi-ka

de l'*Anthologie millénaire*

Senzai-waka-shû

- 2^e partie-

- 1275 法橋性憲

日吉の大宮の本地を思ひてよみ侍りける

いつとなくわしのたかねにすむ月の

光を宿す志がの唐崎

- 為度眾生故，方便現涅槃，而實不滅度，常住此說法。我常住於此，以諸神通力，令顛倒眾生，雖近而不見。

- 俊成

つねにすむ鷺のみやまの月だにも
おもひしれとぞ雲がくれる

訳和和歌集 346

- 95. 為現神變

からさきのまつのこすゑに舟よせて

わかやまもとに神そきませる

- 慈円 (5)

むかしをもさやかにそ見るいつる日に

むかふ光のくもりなければ

- 1276 中原師尚

日吉の社に御幸侍りける時、雨のふり侍りける其時になり
てはれにければよみ侍りける

御幸する高嶺の方に雲はれて

空に日吉の志るしをぞ見る

• 1268 僧都範玄

三輪の社にて霞をよめる

杉がえを霞こむれど三輪の山

神の志るしは隠れざりけり

• 1269 平實重

藏人にならぬことを歎きて年來賀茂の社にまうで侍りける
を二千三百度にもあまりける時貴舟の社にまうで柱にか
きつけゝる

今までになど沈むらむきぶね川

かばかり早き神を頼むに

かくて後なむ程なく藏人になり侍りにける。近衛院の御時
なり。

- 1272 賀茂重保

賀茂の社の歌合とて人々すゝめてよみ侍りける時述懐の歌
によめる

君をいのる願を空にみて給へ

わけいかづちの神ならば神

- 1277 圓位法師

高野の山を住みうかれて後、伊勢國二見浦の山寺に侍りけるに太神宮の御山をば神路山と申す大日如來の御垂跡を思ひてよみ侍りける

深くいりて神路の奥を尋ぬれば

又うへもなき峯のまつ風

- 慈円 (124)

鷲の山たへなるこゑのゆかりには

風ふかねとも嶺のまつかせ

- 1278 大中臣爲定朝臣

治承四年遷都の時伊勢太神宮に歸りまゐりて君の御祈念し
申し侍りてよみ侍りける

月よみの神し照らさば徒雲のかゝる

浮世も晴れざらめやは

そののち世の中なほり侍りけるとなむ。

• 1279 能蓮法師

石清水の社に歌合とて人々よみ侍りける時社頭月といへる
心をよめる

岩清水きよき流れの絶えせねば

宿る月さへ隈なかりけり

- 1287 藤原光範朝臣

おなじ大嘗會の主基方の歌よみたてまつりける神樂の歌、
丹後國千年山をよめる

ちとせ山神のよさせる榊葉の

榮えまさるは君がためとか

- 1201 前大納言公任

維摩經十喩此身は水の泡のごとしといへる心をよみ侍りける

ここに消えかしここに結ぶ水の泡の
浮世にめぐる身にこそ有けれ

- 1202

うかべる雲のごとしといへる心を

定めなき身は浮雲によそへつゝ

はてはそれにぞ成果てぬべき

- 1223 宮内卿永範

維摩經十喩、此身如水中月といへるこゝろをよめる

すめば見ゆ濁ればかくる定めなき

此身や水にやどる月影

• 1222 攝政前右大臣 (藤原兼実)

百首の歌よませ侍りける時法文の歌に五智如來をよみ侍りけるに平等性智の心をよみ侍りける

人ごとに變るは夢のまどひにて

さむれば同じ心なりけり

- 慈円 (146)

よしの山雲か花かとなかめけむ

よそめはおなし心なりけり

• 1224 法印慈圓

比叡の山に堂衆學徒不和の事出で來りて學徒皆散りける時千日の山ごもりみちなむ事もちかくひじりの跡をたえむ事を歎きてかすかに山洞にとゞまりて侍りける程に冬にもなりにければ雪ふりたる朝に尊圓法師のもとに遣しける

いとゞしく昔の跡やたえなむと

思ふもかなしけさの白雪

• 1225 尊圓法師

かへし

君か名ぞ猶あらはれむ降る雪に

昔の跡はうづもれぬとも

- 1233 藤原資隆朝臣

維摩經十喻此身は夢の如しといへる心をよめる

見る程は夢もゆめとも志られねば

現もいまは現と思はじ

• 1235 寂蓮法師

高野にまゐりてよみ侍りける

あかつきを高野の山にまつほどや

苔の志たにも有明の月

1217 前参议教长

即身成佛の心を

照る月の心の水にすみぬれば

やがてこの身に光をぞさす

- 1254 律師永觀

往生講式かき侍りける時教化の歌よみ侍りける

皆人をわたさむと思ふ心こそ

極樂にゆく志るべなりけれ